

**アークフラッシュ施工された老人施設からは5年間インフルエンザの発症が報告されておりません。**

茨城県水海道市内の採卵養鶏場で四 - 六月にかけて鶏計八百四羽が死に、農林水産省は二十六日、国内初のH5N2型の高病原性鳥インフルエンザウイルスが検出されたと発表した。県によると、これまで養鶏場の従業員や家族に健康上の問題は出ていない。

国内での鳥インフルエンザ発生は、昨年一月に山口県で七十九年ぶりに確認された後、二月に大分県、二 - 三月に京都府内の二カ所で集団感染が確認されて以来で戦後五例目。昨年のウイルスはいずれも強毒性のH5N1型だったが、今回のH5N2型は感染力や毒性が弱いタイプという。

県は同日、家畜伝染病予防法に基づき、検出された養鶏場から半径五キロ以内の養鶏場に約七十万羽の鶏や卵の移動制限を命じた。二十七日朝から感染があった養鶏場の鶏約二万五千羽すべての殺処分を行う。念のため従業員らの抗体検査もする。感染ルートは分かっておらず、県などが今後調査を進める。

ウイルスが検出されたのは、同市坂手町の採卵養鶏場「アレバメントカントウ」。飼育している鶏約二万五千羽のうち、四月に三百八羽、五月に二百六十八羽、六月に入ってから二百二十八羽が死に、以前は九割あった産卵率が一時四割まで落ち込んだ。

民間機関による簡易検査で鳥インフルエンザの陽性反応が出たため、県が動物衛生研究所（茨城県つくば市）に精密検査を依頼した結果、H5N2型と判明した。

同養鶏場は鶏の産卵率低下などが起きた後も一日当たり約一万八千個の鶏卵出荷を続けており、埼玉県内の卸業者や東京都内の小売店を通じて首都圏に流通していた。

H5N2型は昨年十二月に韓国の農場でアヒルから検出されたほか、台湾では渡り鳥から見つかった。

弱毒性だが、鶏の間で感染を繰り返すうちに強毒性に変異する恐れがあるため、農水省は高病原性として分類した。

#### ■食べても感染せず

茨城県での鳥インフルエンザ発生を受けて農水省は、「鶏肉や卵を食べて感染することはない」とし、養鶏場から出荷された卵の回収はしない方針だ。厚労省も「人に感染する可能性は少ないとみられる」と冷静な対応を呼びかけている。

喜田宏北大教授（獣医微生物学）は「今回感染した鶏が体外に排出したウイルスの量は少なく、人に感染する可能性は極めて低い」とみる。 ???

ただ、H5N2型は過去に米国やイタリア、メキシコで、鶏から鶏へと感染を繰り返すうち、毒性の強いタイプに変異して大流行した例があり、専門家は「対策が遅れれば大事になった」と指摘する。

大槻公一鳥取大教授（同）は「H5N2型は感染実験で鶏に対する感染力が強くないが、今回は養鶏場で感染が広がっており、以前に流行した米国など北米から感染力を持ったウイルスが入ったのでは」と指摘する。日米間は人や物流の往来が多いためだ。

農水省の対策は、鶏がバタバタと大量死するような病原性の強いウイルスの発見に力点が置かれ、産卵率の低下といった弱毒ウイルスの発見には関心が薄かった。

喜田教授は「人への感染や鶏への蔓延（まんえん）を未然に防ぐためには、家畜保健衛生所が健康な鶏にも異常がないかきめ細かく定期的に監視する仕組みを作ることが大事だ」と説く。弱毒ウイルスでも鶏の殺処分で徹底的に**封じ込めることが重要だ**。

鳥インフルエンザ 中国や東南アジアなどで一昨年秋以降、猛威を振るい、感染した鶏が大量死した。人のインフルエンザウイルスとは別のA型ウイルスによる感染症だが、ウイルスが変異して人に強い感染力を持つと、新型インフルエンザとして流行する恐れがある。ウイルスにはさまざまな亜種があり、H（赤血球凝集素）とN（ノイラミニダーゼ蛋白）の組み合わせで分類される。昨年日本で発生したH5N1型は鳥から人への感染や人の**死亡例があるが**、H5N2型で人への感染例は海外でも報告されていない。（これから感染する事も有る！！）